

釣り人気復活作戦



足止めされたアユなどを捕獲するため「3号井堰」下流で投網を打つ市民ら(20日、京都市右京・西京区境の桂川)

釣り人の減少を食い止めようと、鴨川以外の河川でも漁協が模索を続けている。川や湖沼など内水面漁業の不振は、自然環境のさらなる悪化や農山村の衰退を招きかねない。漁業振興に向けた新法が近年整備され、国や自治体、漁協の役割が定められた。(万代憲司、目黒重幸)

府内河川の漁協

投網を上げると、体長17、18センチのアユが次々と掛かった。海に下ったアマゴが大きく戻ってきたアユが、マスも捕れ、驚きの声が上がった。



天然アユ川上へ運搬



大阪湾から上ってきたとみられるアユ(20日、京都市右京・西京区境の桂川) サツキマス。海に下ったアマゴが成長して戻ってきた(同)



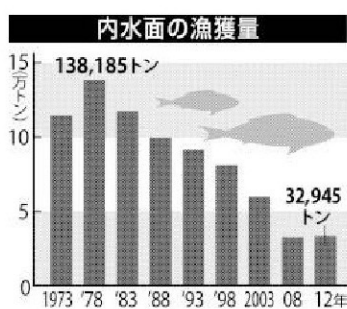
場とする美山漁協(南丹市)は2005年から、釣った魚を再放流してもらう「キャッチ・アンド・リリース特別区」を支流に設けている。ルアーや毛針釣りのリピーターを中心に年間延べ千人が訪れるようになった。同区を管理する勝山賢一さん(54)ら有志は08年からヤマメの稚魚放流を始めた。日本海に注ぐ由良川は、体に朱点があるアマゴではなく本来はヤマメの生息域。勝山さんは「もともといた魚にするべきだと思った。釣り人にも好評です」と話す。

卵放流 美形のアマゴ

入源だったが、金をめぐる不祥事や企業経営悪化で収入が途絶えた。魚の放流に多額の費用をかけることができなくなっている。

これからは、放した魚を釣らせる釣り堀のような川でなく、天然資源に基づく川にしていく必要がある。鴨川での取り組みは、そのケーススタディーとして始めた。魚が好んで産卵するのは、流された土砂がマウンドのようにたまった場所。川底を固めるのではなく、土砂が移動できるようにしてはならない。大阪湾からのアユの遡上を妨げている淀川河口の堰の運用改善など、河川行政がやるべきことも多い。

魚道の設置や生息調査を手伝うなど、市民ができることもある。天然資源を漁協のなりわいに結びつけられるよう、川魚を食べる文化も復活させたい。



新たな取り組みに乗り出している各漁協だが、内情は厳しい。美山川は49河川のアユを食べ比べる全国コンテストで2年連続の準グランプリに輝くブランド河川だが、美山漁協は2013年度、14年度と2年連続で600万円超の損失金を出した。

減る遊漁料、厳しい懐

きたアユ年券は、昨年度は898枚まで落ち込んだ。13年から2年連続した豪雨被害も川に大きなダメージを与えた。松田茅里理事長(75)は「一体どこから手を付けたいのか」とため息をつく。国の統計では、川や湖沼など内水面漁業の全国生産量は1978年をピークに減少を続けている。水産資源の枯渇が心配されることから、昨年6月、議員立法で「内水面漁業の振興に関する法律」が成立した。国や自治体、漁協に対し、水産資源の回復や漁場環境の再生に向けた責務や努力を明記した。内水面漁業には、河川環境の保全、観光と結びついた農山村の振興、市民が自然に親しむ機会の提供など、多くの役割が期待されている。同法はこれらの機能を再評価し、漁業振興に必要な施策を総合的に進めるとしている。

「釣り堀」から自然の川へ



川の復活に向け、漁協や関係者は何をすべきか。河川生態系に詳しく、賀茂川漁協理事や「京の川の恵みを活かす会」代表を務める竹門康弘京都大防災研究所准教授—写真—に抱負を聞いた。

漁協は川の守り手だ。川の汚染や乱開発に反対の声を上げてきたし、捕獲の規制を設けることで魚も守ってきた。漁協がなくなれば川は荒れるだろう。近年はどこも経営が苦しい。各漁協は企業からの協力金や公共事業の補償金が大きな収

京の川の恵みを活かす会 竹門代表に聞く